

美術科学習指導案

指導者 熊野町立熊野東中学校 前寄 飛鳥

- 1 日 時 平成19年 9月 12日 (水) 6校時
- 2 学 年・組 第1学年 1組 (37名)
- 3 場 所 美術室
- 4 題 材 名 立体に表す楽しみ ～立体コピーをしよう～
- 5 題材について

- 本題材は、学習指導要領の第1学年の内容「A表現」(1) 絵や彫刻などに表現する活動の「ウ 描画における形や色彩の表し方、彫刻などにおける立体としてのものの見方や、意図に応じた材料や用具の生かし方など基礎的技能を身に付けること」を受けて設定した。彫刻表現は材料にじかに触れる、また、空間における表現という点で絵画にはない要素を持っている。さらに、手を通して感じ、判断し、「触感」を味わい立体表現の楽しさを感じさせ、その美しさや仕組みについて体験させることは大変重要な内容といえる。また、本題材は、はじめて扱う彫刻分野なので、粘土を使用する。粘土はやわらかく、可塑性に優れた素材で、一見扱いやすく見える。しかし、この扱いやすさは、作者の力量どおりに形が表れるという正直な素材である。粘土は作者の手ではじめて形となっていくもので、作者が何もしなければただの塊にすぎない。作者は何を作るべきか、明確に意思を持っていないと形は生まれない。この形をつくらうとする意思を養うことこそ表現の第一歩である。以上のように自ら粘土に働きかけることで形が生まれることを考えたとき、粘土は最適な素材であるといえる。
- 本学級の生徒は明るく活発で、何事に対しても興味を持って取り組んでいる。しかし、学習に対する規範意識が低いところが課題である。美術科の課題として、現在までの造形体験によって、美術に対して苦手意識を持っている者が少なくないことがあげられる。特に、中学生は発達段階的にも写実期を迎え、上手に制作しなければならないという意識が強いが、生徒の活動はすべて個人差の表現であるという前提で、個々の能力や特性が十分発揮できるように指導していくことがこれからの課題である。
- 本題材では、造形素材に触れる楽しさについて十分に体感させ、その美しさや形の仕組みについて理解させたい。また、粘土そのものの性質を楽しませ、形作る喜びと意欲を高めさせ、自分の表したい形を粘土で成形できるようにさせ、完成した達成感・充実感を味わわせ、美術への興味関心を高めていきたい。具体的には導入で、さまざまな彫刻を見るだけでなく触ることを通して鑑賞させたい。次に「触感」を味わうことや、「造形遊び」の要素を取り入れ、生徒たちが興味を持つようにし、制作においては参考作品を見せ、制作の見通しを持たせ、実際にモチーフをスケッチして作品の出来上りを具体的にイメージさせたい。また、粘土と用具の関係、粘土の扱いかたの体験をさせ、生徒の理解を助け、その特性を生かして効果的な肉づけをし、混色重色の工夫をさせながら作品の完成を目指したい。特に、本時(第2次)は、6種類の自然物・人工物に触れ、言葉でまとめさせることで「触感」への理解を助け、次の制作へつなげていきたい。また、粘土に慣れていない生徒たちなので、簡単な形をつくらせ、どのように扱ったらよいか感覚を持たせたい。最後に、6種類の触感の中から1つ選び、再現させる。このときに、どのように制作するのか、どのように道具を活用するか工夫させ、次時の制作活動につなげさせたい。まとめでは相互鑑賞を取り入れ、今後の制作のヒントとさせたい。

6 題材の目標

身近な自然物から立体としてのよさや美しさを感じ取り、粘土の持つ特性に親しみながら構想して表すとともに、立体作品として表す楽しさを味わうことができる。

7 題材の評価規準

美術への関心・意欲・態度	発想や構想の能力	創造的な技能	鑑賞の能力
立体に表す楽しさを味わいながら制作しようとしている。	粘土の持つ特性に親しみながら、制作する形を構想している。	粘土の持つ特性に親しみながら、立体表現としてのよさや美しさを表している。	立体作品の多様な表現のよさや美しさを感じ取り味わっている。

8 指導と評価の計画（全8時間）

次	時間	学習内容	評価の観点				評価規準	評価方法
			関	発	技	鑑		
第1次	1	彫刻の表現				○	○立体作品の多様な表現のよさや美しさを感じ取り味わっている。(鑑)	・行動観察 ・自己評価カード ・ワークシート
第2次	1 (本時)	粘土の特性について	○				○立体に表す楽しさを味わいながら制作しようとしている。(関)	・行動観察 ・自己評価カード ・ワークシート
第3次	1	対象をスケッチする。		○			○粘土の持つ特性に親しみながら、制作する形を構想している。(発)	・行動観察 ・アイデアスケッチ
第4次	4	対象を粘土でスケッチする。	○		○	◎	○立体に表す楽しさを味わいながら制作しようとしている。(関) ○粘土の持つ特性に親しみながら、制作する形を構想している。(発) ○粘土の持つ特性に親しみながら、立体表現としてのよさや美しさを表している。(創)	・行動観察 ・自己評価カード ・作品
第5次	1	完成作品を鑑賞する。				○	○立体作品の多様な表現のよさや美しさを感じ取り味わっている。(鑑)	・振り返りシート ・鑑賞カード

9 本時の展開

(1) 本時の目標

「触感」を大切にし、粘土で立体に表す楽しさを味わいながら制作に取り組むことができる。

(2) 評価規準

立体に表す楽しさを味わいながら制作しようとしている。(美術への関心・意欲・態度)

(3) 準備物

生徒：教科書，資料集，美術ファイル，筆記用具

教師：粘土，粘土板，粘土ペラ，“？（はてな）”ボックス，いろいろな感触のモチーフなど

(4) 学習の展開

	学習活動	指導上の留意事項	評価規準 (評価方法)
導入	○本時の内容・目標を知る。	○出席確認 ○前時を振り返らせ，本時への展開へとつなげる。 ○机上の配置の確認をさせる。	
展開	○触感を味わう。 ○粘土で簡単なものを作る。 ○触感の再現をする。	○粘土の触感を味わわせる前に，？ボックスを使い，いろいろな自然物や人工物の触感を味わわせることで触感に対する関心を持たせる。 ○ワークシートに触感を言葉でまとめさせる。 ○粘土を初めて扱うので，ウォーミングアップをする活動を取り入れる。 ○簡単な形を形成するとき，触れ方が変わると，いろいろな形が生まれてくるという，手と粘土の関係を理解させる。 例：球をつくるときには両手で球をつかんだときの形になる，など ○粘土の性質について確認する。 ○触らせることで触感を確認させ触感の再現をさせる。 ○粘土ペラなど用具の使い方に気をつけさせ，効果的に制作させる。 C と判断される生徒への手立て ○粘土をどのように扱えばよいかヒントを与える（ヒントの例：思う形にならない→粘土と手の関係をもう一度やってみる，触感の再現が難しい→再度触感を確認させる，道具の扱いを工夫させる，など）	B おおむね満足できる状況 ○立体に表す楽しさを味わいながら制作しようとしている。 A と判断される状況 (例) ○立体に表す楽しさを味わいながら意欲的に制作している。 (行動観察・自己評価カード・ワークシート)
まとめ	○他の人の作品を鑑賞する。 ○片付け ○本時のまとめ	○班の中で他の人の作品を鑑賞し，よいところを付箋に書かせ作品制作の参考にさせる。 ○用具の手入れを徹底させる。 ○次回の予告をする。 ○自己評価をまとめさせる。	

